

CAUA 設立 15 周年記念シンポジウム全体講評 「インターネットはこうして始まった～イノベーションと人材開発の今を考える～」

只木 進一
佐賀大学教授、CAUA 運営委員

1960 年代末に ARPANET が発足し、インターネットが産声を上げました。それから 10 年ほど経過して、日本にインターネットの夜明けが来ました。今回のシンポジウムでは、日本のインターネットの初期から関わってこられた、釜江先生、後藤先生、砂原先生に加えて、若手の小町先生を交えて、インターネットを巡ってお話を伺いました。

1980 年代、インターネットという新しい技術が今まで見たことも無い、全く新しい世界を開くという確信にも似た期待から、大学、企業、政府の若い世代が必死になって動いた様子が熱い想いととも語られました。組織、制度、予算などの枠を乗り越えて、なんとかしてインターネット環境を作り出した様子が、3 人の講演からひしひしと伝わってきました。会場にもその頃の経験のある方が多く、大変な盛り上がりでした。

1990 年代中盤まで、インターネットという新しいおもちゃを手に入れた研究者、技術者は様々な困難の中で、日本語対応ソフトウェア、ネットワーク上のコミュニティなどを共同研究的に作り上げました。新しいモノを提案するとすぐに反響があり、さらに発明・開発が加速するという理想的な環境でした。自由な発想の若手と、その活動を見守る姿勢があったことも幸いでした。

翻って、今のインターネットを取り巻く日本の環境はどうでしょうか。急速に量的に拡大するとともに多様化した状況に、研究や開発がついていけなくなっているとの意見もあります。インターネットが社会基盤となったことによって、遊びの部分が減ってしまったことも影響しているでしょう。しかし、それだけではないようです。

インターネットの普及は、中央と地方の情報格差を無くすと言われてきました。しかし、実際には東京一極集中が加速しています。特に、情報関連の研究所や企業が集中しています。インターネットを生み出し育てた多様な考え方を伸ばし、さらに新しいモノや事を生み出すためには、一極集中はマイナス要因になっているように思われます。そこに、博士の学位を軽視したり、大学院での再教育を必要と感ぜない風潮が、新しいモノを生み出せない状況に追い打ちをかけているかもしれません。

高等教育機関や情報関連企業が、若い研究者・技術者が多様な個性を自由に能力を伸ばす環境を作るにはどうしたら良いでしょうか。